

選評

塩田 稔雄

前田青邨筆「御輿振」についての考察—近代における絵巻復興—

前田青邨は多くの絵巻を制作した画家である。本論文は、それら青邨絵巻の初期作として重要な位置を占め、第六回文部省美術展覧会に出品された「御輿振」（一九一二年、東京国立博物館蔵）に注目した論文である。論文の内容は前半と後半に大別できる。

論文前半は、古絵巻からの引用という視点からの分析である。従来、「御輿振」には「伴大納言絵巻」「信貴山縁起絵巻」などからの引用があるとの漠然とした指摘がなされていたが、本論文は、人物の衣服、足指、表情などの具体例を明示し、その正しさを証明するばかりでなく、新たな見解として、「御輿振」が「一遍聖絵」第七卷第二段の全体の構図を下敷きとし、そこから複数の部分を引用して描かれていることを指摘した。挿図として明示される橋桁の構造、板橋を渡る稚児、暖簾から顔を覗かせる人物、門木に掛けられた門守などは、鋭敏な意識で観察しないと見逃してしまうものばかりで、どれもが実に興味深い。青邨の図様の参照先が古絵巻以外にも有職故実などの出版物に及んでいるという指摘も、新知見となる。

現在、東京国立博物館が所蔵する「一遍聖絵」第七卷は、当時、古美術の蒐集家であり青邨のパトロンでもあった原三溪が一九〇六年から愛蔵していた。本論文は、青邨による「御輿振」の制作が横浜・三溪園の鶴翔閣で行われたこと、青邨自身による「一遍聖絵」を度々参照したという証言にも言及することで、「御輿振」における「一遍聖絵」第七卷からの引用が、画家とパトロンとの密接な関係を介して具現化されたことを実証した。

論文後半は、「御輿振」制作の背景に絵巻復興ともいえるムーヴメントがあったのではないかとこの視点からの分析である。当時は展覧会への絵巻出品が好意的に受け入れられ、また絵巻学習が画家たちの刺激となり、絵巻の複製も市場に出回っていた状況下で、「絵巻＝古典、伝統」という図式が強化されていたとする。さらに『国華』誌を中心に展開された瀧精一の絵巻論が、同時代の美術批評家に影響を与え、一連の絵巻復興の大きな要因となり、さらに青邨の絵巻制作における物語性の捨象や群衆の描写に主眼を置く態度にも、瀧の議論が投影されていると本論文は見る。制作者と美術史家の言説とが、いわば共犯的に関与するようになった近代の事象を言い当てた見解として大きく評価されよう。

本論文は作品そのものを出発点とし、画家が参照し引用した作例との比較検討によって作品の特質を浮かび上がらせる一方、作品と画家をとりまくパトロンの趣向や美術史家の言説へと視野を広げ、作品とそれを生みだした時代相の分析を相互に補完させることで、多くの新知見を堅実にまとめている。今後、本論文は近代絵巻研究において頻繁に引用されてゆくはずである。ただし、限られた紙面に多方面にわたる検証が詰め込まれた感が否めないのも事実である。個々の観点が今後より深められていくことを期待し、あえて付言しておく。

以上の点を踏まえ、本論文を『美術史』論文賞にふさわしいと判断する。ここに塩田稔雄氏の功績を称え、氏のさらなる飛躍を楽しみにしたい。